



岡市友利先生を偲んで

瀬戸内海研究会議 理事長 香川大学 教授
多田 邦尚

1. はじめに

元瀬戸内海研究会議会長岡市友利先生が、令和6年10月12日に95歳で逝去されました。

先生は、東京大学農学部水産学科をご卒業、同大学院生物系研究科に進学後、東京大学農学部助手となられ、農学博士(東京大学)の学位を取得されました。昭和39年に香川大学農学部助教授として着任され、昭和53年には教授に就任されました。先生は、赤潮の発生状況に関する研究、赤潮プランクトン増殖における浅海海水の生理的性質や人為汚染の影響、赤潮鞭毛藻類の毒性など国内外の赤潮に関する生物環境学的研究を展開されました。また同時に、内湾域における物質循環などの海域の環境保全に関する研究を実施され、多大な研究業績をあげられました。昭和62年11月には、高松で世界初の国際赤潮シンポジウムを開催されました。

教育と研究の激務を果たされながらも、学内にあつては、昭和58年には農学部長に、平成3年には香川大学長に就任され、全国に先駆けて連合大学院博士課程の創設や農学部改組、国際交流基金の設立、全学部改組による工学部の新設などの大学の牽引車としてもその手腕を発揮されました。そのかわり、社会活動にも尽力され、平成4年には瀬戸内海環境保全審議会会長、平成10年から瀬戸内海研究会議会長として瀬戸内海に係る重大な事項などの調査審議に力を注がれました。

以上のような数々のご業績により、先生は日本水産学会奨励賞、日本海洋学会賞、四国新聞文化賞、日本農学賞、読売農学賞、山陽新聞賞、など多くの学術賞の受賞をはじめ、環境保全功労章表彰(環境庁長官)、平成6年には紫綬褒章、平成15年には瑞宝重光章を受章されました。

先生は、気さくで親しみやすい方で、学生の面倒見もよく、骨身を惜しまずどこにでも出向かれ、多くの分野の人々から敬愛をうけておられました。

私は岡市先生の学生として、また、旧岡市研究室を継承する者として、ずっと岡市先生の背中を見て参りました。ここに岡市友利先生を偲んで、岡市先生在りし日の思い出などを述べてみたいと思います。

2. 岡市研究室の学生として

私は昭和54年に香川大学農学部に入學し、4年次に海水利用学研究室(旧岡市研究室)に入りました。私はあまり優秀な学生ではなく、先生によく怒られました。「ダメじゃないか、多田君」、この言葉を何度も聞きました。研究室に入っすぐの頃、「わからない事は、ちゃんとわからないと言いなさい。そして質問しなさい。知ったかぶりをするんじゃない」と叱られたことがありました。その後、なんでも質問するようにしていたら、「君は今まで、いったい何を習ってきたんだね？」と呆れられてしまいました。そんな時は「僕の学生生活は前半が部活、後半は勉強の必勝態勢です。地味な努力家なので、長い目で見てやって下さい」などと答えていましたが、先生は「そうかい」と微笑んでおられました。ただ、私が大学院生の頃、先生は農学部長として学部のカリキュラム改革を進めておられ、「もうこれからは、君のような前半部活、後半勉強なんて言ってるのは排除してやる」といたずらっぽく微笑んでおられたのが、今でも懐かしく思い出されます。

私は岡市研究室で大学院修士課程を終え、いろいろ思い悩んだ末に北海道大学大学院水産学研究科の博士後期課程に進学することになりました。実は、この時期は、岡市先生は学部長として連合大学院博士課程の創設に奔走され、まさしく次年度からの開設にこぎつけられたところでした。博士課程進学を決めていた私に、周りの先生からは「ちょうど、君の進学時に博士課程が新設されることになり良かったね」などと声を掛けられていました。そんな中で、私は香川大学を出て行ったのでした。北大受験前に、岡市先生に「先生が連合大学院博士課程の創設に奔走されているのに、そのお膝元の学生の私が、そこに進学せずに北大を受験し申し訳ありません」とお詫びしました。その時先生は、にっこりされて、「君はここ香川で胡坐をかくような男じゃないんだよ。北大に行って他流試合をしたい君の気持ちはよくわかる。ただ、北大には私の知った先生も沢山いらっしゃる。北大に行ったら、香川の代表だと思ってしっかりやって来なさい。恥かくなような真似したら承知しないから」と言われました。その時の事は決して忘れることはできません。岡市先生の底知れない器の大きさを感じました。

研究者を志した頃、岡市先生から「研究者として、一番大切なものは何だと思う？」と質問されました。「研究者としての能力、センスだと思います」と答えました。「違うんだよ、一に健康、二に人付き合い、三に研究能力だ。研究能力なんて三番目でいいんだよ。君は健康そうだし、人付き合いも良さそうだからいいんじゃないか？研究能力の方は知らんが・・・」と言われました。褒められていたのかどうかは今もわかりません。ただ、この言葉が研究に自信が持てない私の背中を押してくれたのは事実です。

3. 研究室の教員になってから

平成 2 年に母校香川大学の助手に採用され、今度は岡市先生の部下となりました。最初に言われた事は、「東大・京大型の研究をしてはいけない」ということでした。若い研究者は流行りの研究をしたがるけれども、旧帝大と張り合うような研究をしてはいけない。大学の設備も予算の規模も大きく違うところと競争しても勝てないという事でした。「よく、そんなテーマを思いついたねと言われるような事をやってみなさい。また既存の学問分野にこだわらず、自分のやりたい研究ができる分野が無ければ、自分で新しい学問分野を創るくらいの気持ちでやりなさい」とも言われました。それは、簡単なことではなく、あれから 35 年が過ぎ、定年退職を間近に控えた今も、そのアドバイスに答えられたのかはわかりません。ただ、他人の研究に感銘を受けても、その真似は決してやるまいと強く意識してきました。研究テーマや戦略は、オーソドックスな王道をゆくよりは、人と違ったアプローチの仕方、あるいは他人から「おもしろいね、よく思いついたね」と言われるように、ラグビーで言うならばスクラムからボールをオープンに展開するよりは不意にブラインドサイドを突くような研究を常に志してきました。

岡市先生は、研究に対する姿勢として、私にこんな話をされたことがありました。「日本一の大学は東京大学です。私のところには、日頃から漁師の方やいろんな方が来て、いろんな質問をしてくる。その質問には、必ず東京大学のある教授のところに行けば教えてもらえる。けれど、私がその先生を紹介しても、それは質問に答えたことにならない。だから、私なりにこういことだと思ふと答えるようにしている。地方大学とはそういうところで、学問とはそういうものだと思ふておる」この言葉は、私の大学教員としての研究に対する姿勢を決めたものになりました。研究をして論文を書いて、学生を教育することが大学教員の本来の仕事ですが、一般の人の疑問に答えるよう努力し、また社会に貢献できることを常々考え、これまでに瀬戸内海研究会議(以下「研究会議」)の副理事長、企画委員長としての仕事にも取り組んで来ました。

岡市先生は優しくはありましたが、普段は非常に厳しい先生でした。優しい言葉は何度もかけて頂きましたが、褒められることはありませんでした。過去、一度だけ、「よくやった！」と褒めて頂いた事がありました。それは、研究室の一見(いちみ)先生と二人で、社会貢献活動として地元の子供や一般市民の方を対

象に干潟観察会を開催する際のテキストとして「瀬戸内圏の干潟生物ハンドブック」(恒星社厚生閣)を出版した時でした。先生からの「よくやった！いいものを作ったよ」の一言は涙が出るほど嬉しかったのですが、正直に「僕は出版費用をかき集めてただけです。ハンドブックはほとんど一見先生が作成しました。彼を褒めてやって下さい」と言いますと、「多田君、教授とはそんなもんだよ」と。ちょうど教授に昇任し、学内の雑用や研究教育以外の事に膨大な時間が割かれ始め、自分なりにこんなことで良いのかと自問自答していた頃でしたので、岡市先生からの「教授とはそんなもんだよ」の一言には救われたような気がしました。

4. おわりに

私は、岡市先生の元学生であった事もあり、先生はいつも雲の上の人のようにでした。先生は常にお忙しかった事もあり、二人でゆっくりとお話をしたことはありませんでした。ただ、いつも良く人を見ておられ、その人の事を思いやり、的確なアドバイスをされる方だったと思います。岡市先生はいつも多くを語られませんが、その言葉のひとつひとつはとても重みのある言葉でした。今でも、『あのとき、先生がこんなことをおっしゃったのは、こういうことだったのか？』と思うことがあります。また、現在私は、一見先生、山口先生と技術職員(調査船船長)の岸本さんと一緒に研究室を運営していますが、岡市先生からして頂いた事は彼らにもしてあげられるように常に心がけてやってきました。私の大学教員としてのこれまでは、いつも岡市先生の背中を追いかけて来たように思います。そして、決して追いつくことはありませんでした。

平成4年8月「瀬戸内海研究会議」が設立され、第1回のシンポジウムが開催されるので、君も来なさいよ」と言われ、何もわからず広島までお供してから既に32年が過ぎていました。岡市先生は平成15年まで研究会議の会長を務められ、その21年後に弟子の私が引き継ぐ事になりました。「多田君、しっかりやりなさいよ」、そんな声が聞こえてきそうに感じています。本当に偉大な「研究者・大学人・リーダー・師匠」であった岡市先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



写真1 岡市 友利先生



写真2 著者の学生時代 岡市先生にお酌して頂く